

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月31日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330130

研究課題名（和文） コミュニティによる災害文化生成に関する環境社会学的研究

研究課題名（英文） An environmental sociological study on creation and succession of the disaster culture by the community

研究代表者

古川 彰 (FURUKAWA AKIRA)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：90199422

研究成果の概要（和文）：

災害に対する、地元の人々の対処の方法とそれらが文化化されてきたプロセスを記述、分析することを通して、突発的な出来事への対応としての災害対策ではない、それぞれの小さな共同体がもつ独自に生成してきた災害文化の論理と実践性を明かにした。生活世界に根ざした知の実践の創造過程に焦点をあてることによって、現代世界が直面するさまざまなリスク対応への新たな視点を提供するとともに、災害および災害対策についての社会学的研究の貢献可能性を示した。

研究成果の概要（英文）：

Through describing the cultural process of coping with the disaster, this research clarifies the social practices engaged by those who live in the local area. The finding is that those practices can be understood as not just a social policy for reducing the damage caused by unexpected events like natural disasters, but an indigenous way of life that people in the small community have created through their own distinctive practices and beliefs. This research presents a new perspective of how we can manage the risk faced in contemporary world in focusing on the process of emergence of knowledge and practice based on people's everyday life. It also suggests the potential contributions carried by sociological researches in the field of studies on disaster and the policies making for management of disasters.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2010年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2011年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
年度			
総計	13,800,000	4,140,000	17,940,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：小さな共同体、災害文化、ローカルな知、河川流域、生活史

1. 研究開始当初の背景

(1) 防災や災害復興において支配的な科学技術主義を相対化するための社会科学的視点の提示が強く求められていた。またその実践可能性についての、方法論的検討が必要と

されていた。

(2) 科学技術主義の支配は、さらに行き過ぎたグローバル化（あるいは世界標準化）によって強化されつつあり、それに対抗するための試みとして、ローカルな地域社会が固有

に発展させてきた制度や規範の再評価があげられる。本研究の代表者、分担者が構築してきた「生活環境主義」は、1980年代からローカルな生活知に着目し、ある程度の理論的立場と方法論を提示してきた。

(3) その理論構築と実践経験を災害研究に援用することが、社会科学的災害研究に有効であるだけでなく、防災や災害復興などの実践にも有効であると予測された。

(4) その研究方法についても、これまでの生活環境主義の研究方法を援用できることが予想された。災害を、それを経験した共同体が、いかにして認識し、対処し、記憶し、癒していくのかという社会的過程に注目する。つまり、共同体が、災害現象を災害文化として転換させていく過程を、長期的で経験論的かつ価値論的な視野からとらえることが必要であり可能であると考えた。

(5) 具体的には、共同体の日常生活世界の中で、災害被災当事者の生活の視点から災害現象を捉え直し、生活再建や地域社会の再生と癒しを理論的かつ実践的にさぐることが要請される。そのために、これまで各地域で人と自然との関係にかかわるローカルな知についての調査をおこない、知見を深めてきたメンバーによる研究体制をつくる必要があった。

2. 研究の目的

(1) 21世紀の世界の動向を規定するグローバル化は、その負の側面として、人種・民族・宗教間の対立抗争や貧困、低開発とならんで急激な環境破壊をもたらした。このような負の側面を、私たちはいかにして乗り越えることができるだろうか。また現代社会学は、この営みのなかでどのような役割を果たすことができるだろうか。本研究はこの点について、代表者等が長期にわたって蓄積してきた「小さな共同体」が創造し再編する知識と実践を手がかりにして、回答を導きだそうと試みる。とりわけ本研究は、「小さな共同体」が経験し対処してきた破局的状況に着目して、共同体の柔軟で重層的な叡知を解明する。

(2) 具体的には、これまで本研究代表者と分担者が共有してきた、琵琶湖北西岸の「村の日記」を共通のプラットフォームにして、「災害文化とコミュニティ」に関する地域社会学的モデルを構築し、社会学的な叡智を現実社会に対する実践的働きかけに結びつける。それらを通して、災害を予防し、対処し、被害者を援護するローカルな知のメカニズムを解明し、比較研究を通してその一般モデルを構築することを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 共同体が、自らが経験した災害現象を、いかにして、予防・対処・記憶・継承するこ

とで災害の文化へと変換するかについて、代表者等（鳥越、古川、松田）が長期にわたってかかわってきた琵琶湖北西岸のコミュニティで270年にわたって連綿と書き綴られてきた「村の日記」およびその膨大な関連史料を共通のプラットフォームにして、それぞれのメンバーが長期に関わってきたフィールドでのインテンシブなフィールドワークに基づいて研究を進めていく。

(2) 本計画は主として河川流域における災害文化生成に焦点をあてているが、ここではそれぞれの地域における恒常的な環境保全の様態、災害への対応、その繰り返しのなかで生成される文化を災害文化と捉える。

(3) 全体の研究計画は、それぞれのフィールドにおいて、共同体がつくりあげる災害文化に焦点をあて、以下の3点を基軸にして調査を実施する。

① 共同体がこれまで蓄積してきた、山林や湖沼河川に対する生態環境保全の知恵と実践について、明らかにする。

② ひとたび山火事や河川の氾濫などで大きな被害をうけたときに、共同体が示す緊急対処と保護の仕組みを解明する。

③ 幾世代にわたって経験してきた災害を、共同体の集合的記憶として編集し継承していく過程を分析する。

4. 研究成果

(1) 災害に対する、地元の人々の対処の方法とそれらが文化化されてきたプロセスを記述、分析することを通して、突発的な出来事への対応としての災害対策ではない、それぞれの小さな共同体がもつ独自に生成してきた災害文化の論理と実践性を明かにした。生活世界に根ざした知の実践の創造過程に焦点をあてることによって、現代世界が直面するさまざまなリスク対応への新たな視点を提供するとともに、災害および災害対策についての社会学的研究の貢献可能性を示した（概要）。

(2) 具体的には、調査・研究の結果、以下のような成果を得た。

① 災害文化を明らかにするための資料収集と解読：琵琶湖北西岸の集落における古文書のうち「村の日記」に関連する文書の翻刻および災害にかかわる記事の分析をおこない、それらを学会報告、論文発表をおこなった。

② ①の調査集落において研究協力者の大学院生を中心に集落の住民と共に共同調査や古文書を読む会などの地域ワークショップを実施し、それらの実践を公刊した。

③ 三重県熊野地方では、研究協力者、行政、NPOなどととも熊野灘の津波、熊野川の河川災害などの共同調査を実施し、報告書を作成した。

④ 全メンバーは各フィールドで、「資料提示型ディープインタビュー」を実施し、写真収集や、調査地にかかわる文書の収集とその分析をおこなうとともに、それらにかかわる論文、学会発表をおこなった。

⑤ 2011.3.11の震災、津波、原発事故発生にともなって、研究協力者とともに被災地となったフィールドでの災害復興に実践的に関わりながら、災害の文化化の実践的側面の調査をおこなった。

⑥ 研究計画最終年度である2011年度は、災害復興や災害論にかかわるシンポジウムや研究会でほとんどのメンバーが報告などを行った。

(3) これらによって得られた知見を次のように整理することができよう。

① 河川工学をはじめとする災害対策の基礎的な知的論理の価値観を「近代技術主義モデル」、その対抗論理としての「自然環境モデル」として、その価値論的評価を相対的に行うことが可能であることを明かにした。

つまり、本研究が災害文化研究の基本的な方法として採用する「生活環境主義モデル」は、生活世界における創発的で対話的な価値論に根深く基盤をおくことで、災害論においても支配的な上記の2つのモデルを相対化する論理力をもつことを示した。研究期間中の3.11災害は、これまでの防災、災害対策技術の支配的モデルであった「近代技術主義モデル」を相対化しておく必要性をより明瞭にした。

② かつての社会科学者の間に隠されていた研究としての特権意識を乗り越え、地域住民や子ども、学校など、災害の潜在的被災者を共同的な主体として連携することで、実践性を内在化できることを実践を通して示した。

3.11災害の経験と災害現場での実践が、研究と実践を不可分なものとするを要請したように、本研究の調査手法を学校教育や地域活動場面に応用することの有効性を示しており、社会科学的災害研究の限界を超える可能性を示唆している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

① 古川彰、幸福の単位—昭和戦前・戦中期における家、村、国家、関西学院大学社会学部紀要、114号、査読無、2012、pp. 79-89.

② 鳥越皓之、大地震と住民自治、耕、125巻、査読無、2011、pp. 29-32.

③ 鬼頭秀一、環境政策を環境倫理から捉える視座—ドイツの環境政策と環境思想の狭間、ドイツ研究、45巻、査読無、2011、pp. 54-68.

④ 土屋雄一郎、廃棄物処理施設の立地をめぐる「必要」と「迷惑」—「公募型」合意形成にみる連帯の隘路—、環境社会学研究、第17号、査読有、2011、pp. 81-95.

⑤ 阿部潔・古川彰、社会表象研究の地平—「生きられた文化」への眼差し—、関西学院大学社会学部紀要、111号、査読無、2011、pp. 71-85.

⑥ 鳥越皓之、日本人にとって水辺はどんな存在だったのか、コミュニティ、145号、査読無、2010、pp. 61-68.

⑦ 藤村美穂、ムラの環境史と獣害対策—九州の山村におけるイノシシとの駆け引き、村落社会研究、46集、査読無、2010、pp. 74-114.

⑧ Abe, K., Furukawa, A., Kosaka, K., Social Exclusion and Inclusion in Japan, *Contributions to Nepalese Studies*, CNAS, Tribhuvan Univ., Nepal、査読無、2010、pp. 17-38.

⑨ 松田素二、現代社会における人類学の課題、文化人類学、74巻、査読無、2009、pp. 262-271.

⑩ 鳥越皓之、湧水利用と地元ユーザビリティ、日本民俗学、257号、査読無、2009、pp. 59-82.

[学会発表] (計20件)

① 宮内泰介、宮城県石巻市北上町における集団高台移転計画にかかわって、日本建築家協会東日本大震災復興支援活動報告シンポジウム「震災復興と専門家の連携」、2012.3.9、宮城県仙台市、せんだいメディアテーク.

② 鬼頭秀一、原発事故と生命環境倫理学—「水俣」との比較の中で—、公共哲学シンポジウム「震災・原発問題と公共研究」、2012.3.3、東京都渋谷区、TKP 渋谷カンファレンスセンター.

③ 宮内泰介、宮城県石巻市北上町における集団高台移転計画にかかわって、富山大学3.11後の地域社会を考えるフォーラム、2012.3.2、富山県富山市、富山県民会館.

④ 宮内泰介、復興へのアダプティブ (順応的) なかわりの中で考えたこと、環境社会学学会シンポジウム (東日本大震災被災地に求められるもの—環境社会学はどのように貢献すべきか)、2011.12.11、関西学院大学.

⑤ 鬼頭秀一、ポスト3.11の生命環境倫理—福島第一原発事故を踏まえてその構造的な枠組みを問う—、第30回日本医学哲学・倫理学会大会 基調講演、2011.11.5、東京大学.

⑥ 鬼頭秀一、放射線被曝の時代に生きる、第75回上智哲学会公開シンポジウム「共に生きる智の探求」、2011.10.30、上智大学.

⑦ 宮内泰介、自然環境と地域社会の相互関係：宮城県北上川河口地域事例から、「環境、人類生態と社会文化変遷」系列活動 (「環境・人類生態と社会・文化の変化」ワークショップ)、2011.10.25、台湾.

⑧古川彰、景観を凌駕する経験、日本民俗学会 63 回大会、シンポジウム「景観をめぐる民俗と歴史」2011. 10. 1、滋賀県立大学。

⑨鬼頭秀一、低線量被曝問題における「科学者」の対応の構造的な問題と「科学者」の信頼回復の道筋、日本学術会議哲学委員会シンポジウム「原発災害をめぐる科学者の社会的責任—科学と科学を超えるもの」、2011. 9. 18、東京大学。

⑩藤村美穂、ムラの環境史と獣害対策、林業経済学会(西日本林業経済研究会)、2011. 7. 9、宮崎県諸塚村、諸塚村中央公民館。

⑪宮内泰介、自然再生と環境社会学的視点、日本生態学会大会シンポジウム、2011. 3. 10、札幌。

⑫鬼頭秀一、Polysemous aspect of ecosystem function and redefining "sustainability"、持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2010 -生物多様性の保全と持続可能な利用-日本学術会議・国連大学、2010. 12. 16、ホテル金沢。

⑬宮内泰介、Legitimacy and environmental governance: A case study of the reed bed of Kitakami River, The Third International Conference on Forest Related Traditional Knowledge and Culture in Asia、2010. 12. 15、金沢市。

⑭菅豊、資源としての『自然』と『文化』・客体化され、管理される対象の異質性と同質性、第 8 回現代民俗学会研究会、2010. 11. 27、東京大学。

⑮松田素二、Forest Conservation Discourse as the Weapons of the Strong in a Environmental Crisis of Kenya and Nepal, The Roles of Local Knowledge in Globalized Context, Kyoto International Workshop 2010、2010. 11. 23、京都大学。

⑯土屋雄一郎、廃棄物処分場の立地をめぐる地域紛争と合意形成—環境社会学の視点から、東京大学グローバル COE「世界を先導する原子力教育研究イニシアチブ」、2010. 11. 6、東京大学。

⑰鳥越皓之、風の神と風の三郎、日本生活文化史学会、2010. 9. 18、京都ノートルダム女子大学。

⑱菅豊、日本のコモンズと環境変動—サケの資源利用を題材に—史学会、2009. 11. 7、東京大学。

⑲宮内泰介、Various uses of natural resources and the common property system: A case study of natural resources in malatina, Solomon islands, The Second International Conference on Forest-Related Traditional Knowledge and Culture in Asia、2009. 11. 2、昆明・中国。

⑳宮内泰介、Legitimacy and environmental governance: A case study of the reed bed of Kitakami River, Japan, 15th International Symposium on Society and Resource Management、2009. 7. 6、ウィーン・オーストリア。

〔図書〕(計 10 件)

- ①鳥越皓之、岩波書店、水と日本人、2012、pp. 246.
- ②Matsuda, motoji(ed), Department of Sociology, Kyoto University, *The Roles of Local knowledge in Globalized Context*, 2011, pp. 106.
- ③古川彰、豊田市矢作川研究所、矢作川研究資料集 2—枝下用水 120 年史資料 その 1 (編著)、2011、pp. 88.
- ④Furukawa Akira(ed), Vajra Publications in Kathmandu, Nepal, *Jarun Hiti: Traditional Water Use in Nepal*, 2010, pp. 131.
- ⑤鳥越皓之、早稲田大学出版部、霞ヶ浦の環境と水辺の暮らし (編著)、2010、pp. 263.
- ⑥鳥越皓之 (ほか 6 名の 1 番目)、岩波書店、地域の方で自然エネルギー (共著)、2010、pp. 50-62.
- ⑦三俣学・菅豊・井上真、東京堂出版、ローカル・コモンズの可能性—自治と環境の新たな関係— (編著)、2010、pp. 384.
- ⑧古川彰、関西学院大学、暮らしと歴史のまなび方 (編著)、2010、pp. 108.
- ⑨宮内泰介、昭和堂、半栽培の環境社会学—これからの人と自然 (編著)、2009、pp. 257.
- ⑩松田素二、世界思想社、日常人類学宣言! 生活世界の深層へ／から、2009、pp. 343.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古川 彰 (FURUKAWA AKIRA)
 関西学院大学・社会学部・教授
 研究者番号：90199422

(2) 研究分担者

鳥越 皓之 (TORIGOE HIROYUKI)
 早稲田大学・人間関係学部・教授
 研究者番号：80097873

菅 豊 (SUGA YUTAKA)
 東京大学・東洋文化研究所・教授
 研究者番号：90235846

藤村 美穂 (FUJIMURA MIHO)
 佐賀大学・農学部・准教授
 研究者番号：60301355

宮内 泰介 (MIYAUCHI TAISUKE)
 北海道大学・文学研究科・教授
 研究者番号：50222328

鬼頭 秀一 (KITOH SHUICHI)
東京大学・新領域創成科学研究科・教授
研究者番号：40169892
松田 素二 (MATSUDA MOTOJI)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：50173852
土屋 雄一郎 (TSUCHIYA YUICHIRO)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70434909

(3) 連携研究者

()